12　高齢者進行肺癌治療における包括的機能評価法の意義についての検討

塚田　裕子・杵渕　進一・手塚　貴文
横山　　晶
県立がんセンター新潟病院内科

【背景】高齢者包括的機能評価法（CGA）は，高齢者の慢性疾患において死亡率減少・入院日数短縮など有用性が示されている．

【目的】高齢者進行肺癌治療におけるCGAの有用性を検討する．

【対象と方法】当科入院の70歳以上進行肺癌初回治療例．評価は基本的ADL・手段的ADL（IADL）・MMSE・GDSを用い，治療開始時に医師/看護師が実施，CGAスコアと治療コンプライアンス・重篤な有害事象発現との関係を検討する．

【結果】2005年2月までに52例に評価を実施．年齢は70-74/75歳以上が各26例．PSは0-1/2が46/6例．75歳以上群ではPS不良・ADL/IADL依存・うつ状態例の比率が高かった．PS 0-1でも基本的ADL/IADL依存，認知機能障害，うつ状態例が存在した．重篤な有害事象の頻度はPS 2で有意に高く，ADL依存・うつ状態例でも高い傾向がみられた．

13　進行食道癌に対するネダプラチン＋ドセタキセル療法の検討

秋山　修宏・加藤　俊幸・本山　展隆
新井　　太・船越　和博・稲吉　　潤
井上　　聡
県立がんセンター新潟病院内科

切除不能進行食道癌に対し放射線同時併用化学療法（以下CRT）は第一選択の治療法と考えられている．CRTによりCRに至り長期生存が得られる症例が増加してきているが，CRT後一時的に腫瘍が縮小あるいは消失した後，再発再燃を生じる症例も少なからず存在する．それらのCRT後の再発再燃例に対する有効な治療法が確立されていないのが現状であるが，今回ネダプラチン（CDGP）＋ドセタキセル（DOC）療法が奏功を示した症例を認めたので報告する．

対象はCRT後の再発，再燃例6例で治療法はCDGP 40mg/m^2，DOC 30mg/m^{2}をbiweeklyに投与し，可能な限り継続した．1例に腫瘍からの出血を認めたが有害事象は軽微な症例が多かった．6例中3例（50.0％）にPRの効果を認め，CRT後の再燃例よりも再発例に奏功を示し，CDGP＋DOC療法はCRT後の再発症例に有効な治療法と思われた．

14　胸部食道癌放射線化学療法後のサルベージ手術の治療成績

神田　達夫・小杉　伸一・大橋　　学
榎本　剛彦・牧野　成人・田邊　　匡
鈴木　　力*・畠山　勝義
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科学分野
新潟大学医学部保健学科*

【目的】胸部食道癌患者における放射線化学療法（CRT）後のサルベージ手術の安全性と有用性を明らかにする．

【患者と方法】2005年5月までに当院でサルベージ食道切除が行われた胸部食道癌患者13名を診療録に基き遡及的に分析．

【結果】9名に開胸切除が，4名に経裂孔的切除が行われた．肉眼的完全切除は11名で達成されたが，うち2名で腫瘍剥離断端が陽性であった．ICU在室期間の中央値は3日（0-13日），術後入院期間は40日（16-69日）であった．術後合併症を7名に認めた．在院死亡は1名であった．全13例の累積2年生存率は62％．肉眼的に不完全切除となった2名はともに7か月で原病死したが，病理学的CRの1名と粘膜内の限局性遺残であった1名で4年以上の生存を認めている．

【結語】CRT後のサルベージ手術は通常食道癌手術に比べて不完全切除率が高い可能性がある．CRT後の少量遺残例では長期生存が期待できる．

15 スクリーニングで発見された食道小細胞癌の1例

佐々木正貴・池田 義之・大竹 雅広
須田 武保・柴崎 浩一*・中島 孝司**
味岡 洋一***
日本歯科大学新潟歯学部外科
同 内科*
新潟中央病院内科**
新潟大学大学院分子病態病理***

症例は72歳男性．スクリーニング目的の上部消化管内視鏡で胸部下部食道に軽度の扁平隆起を認め，生検で小細胞癌（内分泌細胞癌）と診断された．術前精査でリンパ節および他臓器転移は認めなかった．手術は経裂孔食道切除術を行った．切除標本では10×5mm大の0-Ⅰ sep腫瘍を認めた．病理診断は内分泌細胞癌，sm3，n（−）で病理組織学的進行度はp StageⅠであった．免疫組織化学的検査ではNCAMが陽性だった．術後High dose FP療法を3コース行い，術後6ヶ月の現在再発を認めていない．

16 臨床病理学的検討からみた中部・下部胃癌に対するリンパ節郭清の考え方

藍澤喜久雄・佐野 文・森岡 伸浩
清永 英利・宮下 薫
燕労災病院外科

【目的】臨床病理学的検討からみた中部・下部胃癌に対するリンパ節郭清範囲を考察する．

【方法】切除胃癌1087例中の中部胃癌317例（29.2％）と下部胃癌506例（46.5％）の823例（75.7％）を検討対象とした．

【結果】リンパ節転移陽性率は，中部胃癌；29.7％，下部胃癌；42.3％であった．また，進行癌で73.4％，下部胃癌の未分化型癌で65.8％と高率であった．部位別リンパ節転移陽性率は，中部胃癌では第1群のNo. 3，4d，1，第2群のNo. 7，8a，下部胃癌では第1群のNo. 6，3，4d，5，第2群のNo. 8a，7，9が高かった．No. 11pの転移率は3.6％であった．

【結語】中部・下部胃癌に対するリンパ節郭清は，D2郭清の範囲で行う．進行癌，とくに下部の未分化型癌のリンパ節転移陽性率は高く，これらに対しては，第2群のリンパ節郭清を精度よく行い，郭清範囲の拡大も考慮すべきである．

17 切除不能進行胃癌に対する術前化学療法としてのTS-1＋CDDP療法

大橋 学・神田 達夫・坂本 薫
矢島 和人・田邊 匡・小杉 伸一
畠山 勝義
新潟大学大学院消化器・一般外科学分野

【目的】切除不能進行胃癌に対する術前化学療法（NAC）としてのTS-1＋CDDP療法の治療成績を検討する．

【対象と方法】2002年1月から2005年4月までの間に，治癒切除不能胃癌と診断された31名を登録した．対象患者にはTS-1＋CDDP療法を行い，治癒切除可能となれば腹腔鏡検査で播種がないことを確認後手術を施行した．手術施行割合と生存期間について検討した．

【結果】31名中7名（23％）が切除可能と診断された．しかし，実際治癒切除を施行された患者は4名（13％）であった．全患者のMSTは341日，1年生存率は39％であったが，治癒切除患者においてはMSTには達せず，1年生存率100％であった．

【結論】切除不能胃癌に対するNACとしてのTS-1＋CDDP療法で治癒切除が可能になる患者は10％程度に過ぎない．しかし，治癒切除が可能であった患者の予後は期待が持てる成績である．

18 大腸癌術後肺転移に対して抗癌剤の時間治療は有効である

宗岡 克樹・白井 良夫*・若井 俊文*
横山 直行*・畠山 勝義*
新津医療センター病院外科
新潟大学大学院消化器・一般外科*

【目的】抗癌剤を至適投与時間に投与する時間